



2026年知財情報フェア 意匠領域の定点観測

AI実装と実務パラダイムの移行（2025 vs 2026 比較調査）

単なる機能比較を超え、AI技術・専門家の評価・統合管理・制度改革が
織りなす「意匠実務の新たなランドスケープ」を紐解く。



Myth: 2026年は意匠AI検索の元年である



クラリベイトのDesignVisionが大々的に展示されたが、実は2025年のJETRO講演等で既に紹介済み。
技術の「初登場」の年ではない。



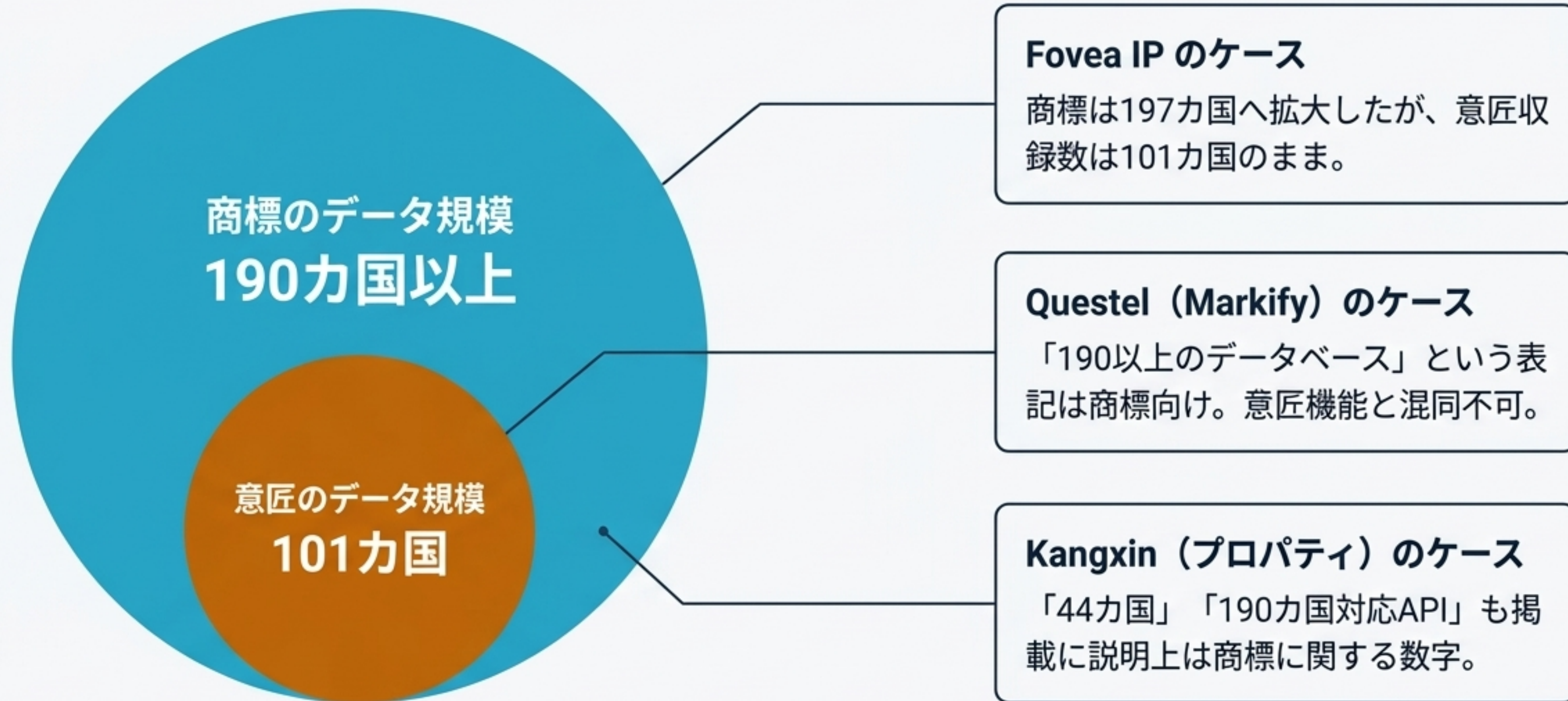
Reality: 「海外動向の把握」から
「自社実務への具体的導入」へ

2026年の真の変化は、AIツールが
「**展示品の珍しさ**」を脱し、各社の製品展示ことにおいて「**具体的なワークフローへの接続**」として提案され始めた点にある。

意匠検索・調査ツールの軌跡と差分（2025-2026）

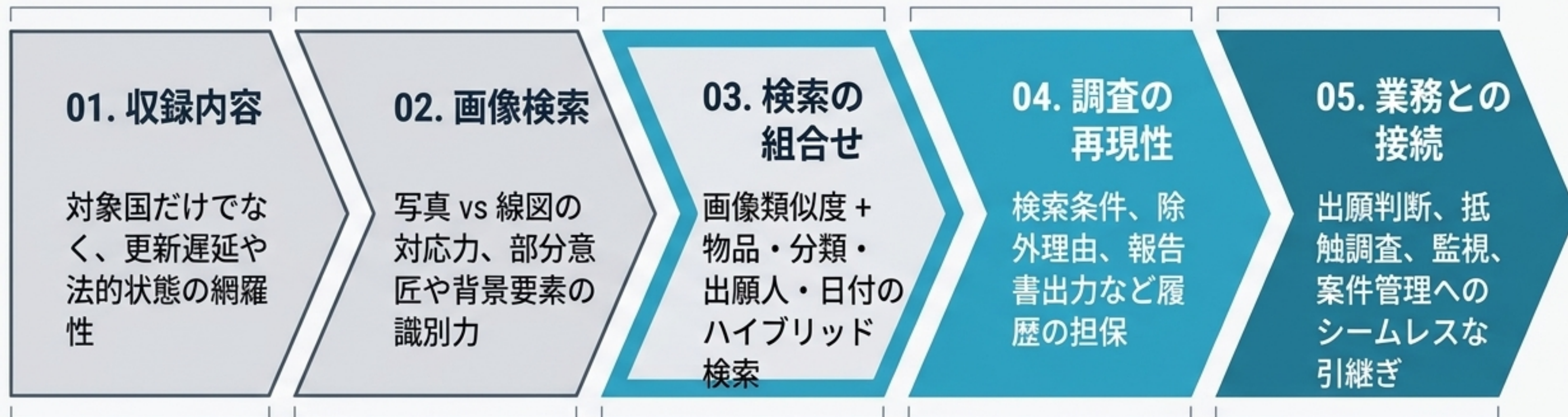
出展者 / 製品	2025年の状況	2026年の状況	実務視点での評価 (Delta)
Fovea IP / Lighthouse IP	意匠101力国・ 独自AI画像検索	データ連携・利用場面を 具体化	AI検索自体は強い継続。 連携面で進化。
Patsnap	意匠96力国・画像検索	両社出展確認	機能縮小とは解釈不可。 継続対象。
Questel (Markify) (Markify)	AI商標・意匠検索	オンライン使用状況 プラットフォーム	継続性が強い。 商標中心の打ち出し。
クラリベイト (DesignVision)	JETRO講演で紹介 (展示未確認)	意匠検索ツールとして 製品名・用途を明示、 画像類似抽出を実演	打ち出し方の明確な変化。 実務への接続を最大化。
プロパティ	既存製品中心	Design Scope画像検索、 PatSea（中国意匠）	意匠関連展示として 重要化。

注意すべきデータの罠：商標と意匠の境界



Key Insight: 表面的なマーケティング数値（商標用）による意匠ツールの比較は極めて危険である。

新たな評価軸の誕生：スペック競争からワークフローへ

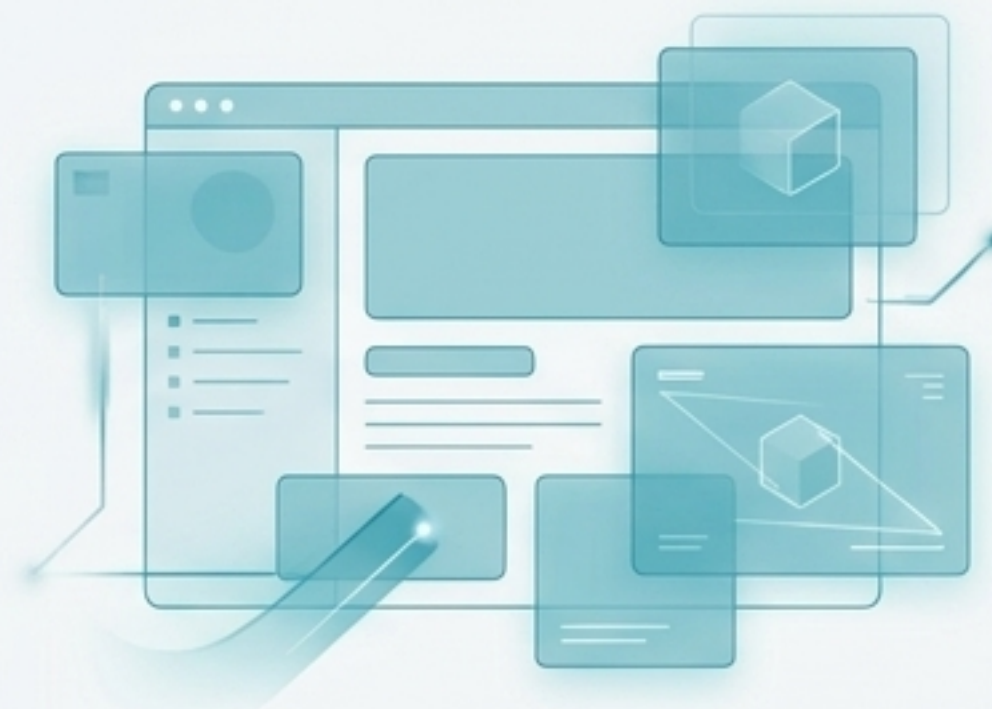


**Insight: 「収録国数」という単一指標の時代は終焉。
製品の優位性は「検索結果の品質」と「後続業務への接続」へ完全に移行した。**

外部環境の触媒：EUIPO意匠制度改革がもたらす圧力



静的・物理的デザイン
(Static / Physical)



動的・非物理的デザイン
(Dynamic / Non-physical)

2025年5月1日: 改正意匠規則 適用開始

2026年7月1日: 一部規定 適用開始

EUIPOによる「AI活用と意匠改革」の発表（2026）は象徴的。「物品の静止画像」に依存した従来の検索ツールの限界が露呈し、次世代AIツールへの移行は法制度改革によって直接的に後押しされている。

AIと専門家の「新しい分業モデル」

Process 1: AIによる候補抽出



- **役割:** 大量データからの高速スクリーニング
- **指標:** 画像の類似度（幾何学的近さ）
- **限界:** 類似度は「権利抵触」と同義ではない



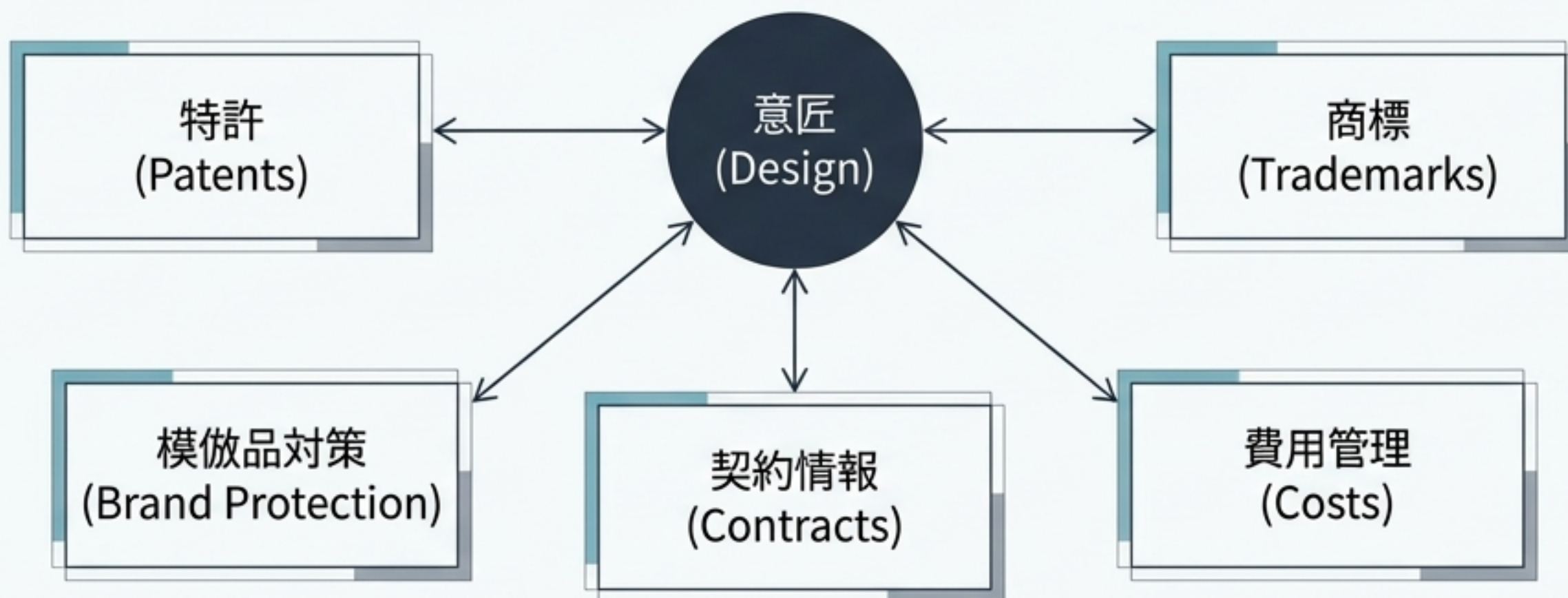
Process 2: 人間による法的評価



- **プレイヤー:** Japio, 角田特許事務所 等
- **役割:** 調査範囲の設計と、法的基準に基づく絞り込み
- **価値:** 登録可能性の判断と結果の説明責任

Insight: AIは専門家の仕事を奪うのではなく、「初期抽出」を自動化することで、専門家のコアバリュー（調査設計と法的説明責任）をより鮮明にした。

意匠実務の「プラットフォーム統合」



市場の具体例

- RightHub: 費用・文書管理・外部連携
- FRIO: グラフ型DBによるファミリー単位管理
- IP Compass: 情報の一元管理

Key Takeaway (点から面へ)

2025年から存在した統合管理の方向性が、2026年には「利用場面」を伴って具体化。検索・管理・権利行使が一つのプロセスとしてシームレスに繋がりは始めている。

デザイン経営の進化： 理念から無形資産戦略へ

2025年フェーズ: 理念と部門連携

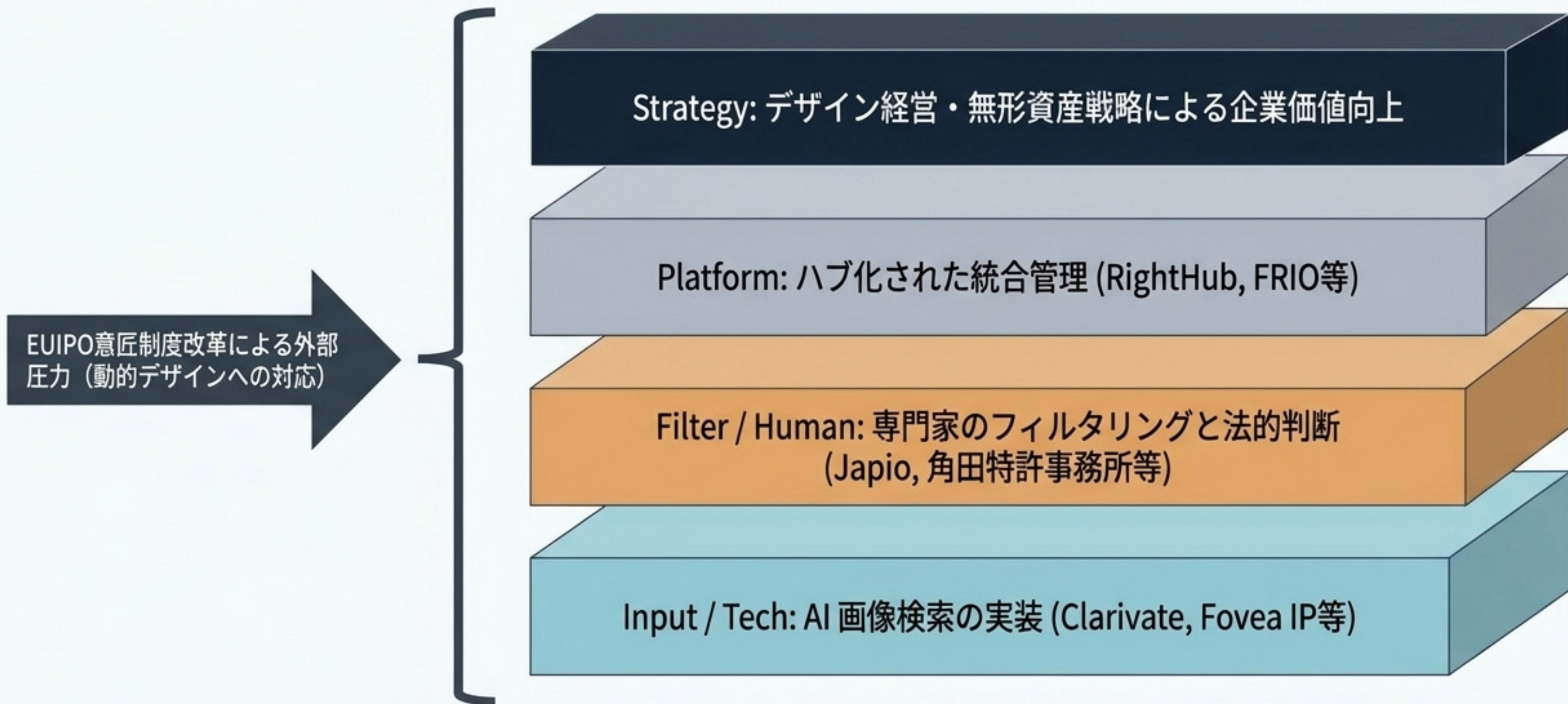
- ・ テーマ: 知財部門の貢献、経営人材育成
- ・ 焦点: デザイン部門と知財部門の社内連携構築

2026年フェーズ: 実践と無形資産戦略

- ・ テーマ: デザインと知財が導く企業価値向上
- ・ 焦点: 意匠権を狭義の「外観保護」から解放し、無形資産全体を横断する推進体制へ（デザイン経営推進機構等）

テーマの重心は「知財部門内の実務」から「経営レベルの企業価値底上げ」へ完全にシフト。

The Blueprint: 2026年の意匠情報エコシステム全体像



実務家への提言 (Actionable Takeaways)



1. マーケティング数値に踊らされない

「190カ国対応」や「生成AI」といった商標領域の数字・バズワードと、実際の意匠専用スペックを厳格に切り分けて評価する。



2. 自社データでの「実機検証」を徹底

カタログスペック（収録国数）だけでなく、自社の実画像を用いた際の「検索精度（写真vs線図）」や「調査の再現性確保」を直接検証する。



3. エコシステム全体の「接続」を設計

AIによる「候補抽出」だけで完結させない。専門家への「評価依頼（引継ぎ）」から、管理ツールでの「統合管理」に至る一連のプロセスをセットで導入設計する。